

Title	大来佐武郎編 都市開発講座1 地域社会と都市
Sub Title	
Author	高橋, 潤二郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1967
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.60, No.8 (1967. 8) ,p.990(156)- 991(157)
JaLC DOI	10.14991/001.19670801-0156
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19670801-0156

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ることではできず、むしろイタリヤ社会の特殊性を反映した個性的現象であることも把握できるのである。(吉川弘文館・昭和四二年二月刊・A5・三四一頁・八〇〇円)

—松浦 保—

大来佐武郎編
都市開発講座I

『地域社会と都市』

最近の学界の特色の一つとして、アカデミックな世界とジャーナリストの世界との接近をあげることができる。ジャーナリズム、或いはより端的にコマーンシャルイズムの寵児となつて、一部の学者——この言葉も随分耳慣れたものになつてきているが——を例外としても、現在、多くの研究者がジャーナリズムの世界と接触を保ちつつその研究を進めている。広義の意味での情報伝達という機能を研究者がもっていることからいって、この傾向は不可避的なものであり、専門の研究者による事実の発見や理論の構成が一般の人々に

広範かつ急速に伝達されるということを考えれば、むしろ大変好ましいことといつてよいだろう。しかしながら、他方、ジャーナリズムの世界との結合は、研究者にとつて、はなはだ危険な要素をも含んでいる。というのは、ジャーナリズムの世界とアカデミックな世界とは、情報の伝達の意味——というよりもそこにおいて何が最も重視されるべきかという認識——が若干のズレをもっているように思われるからである。前者において、情報の伝達は何よりも迅速でなければならぬし、多数の人々に達するものでなければならぬ。いうまでもなく、この場合も情報は正確でなければならぬし、少数の人々を対象とするものもあるであろう。しかしながら、ジャーナリストに対して、迅速と正確、多数の受容者と少数の受容者との二者択一をせざるならば、多くのジャーナリストは恐らく前者を選択するだろう。いうまでもなく、このことは、ジャーナリズムそのものの本質に由来するものでなく、むしろ現在のジャーナリズムと密接につながりのあるコマーンシャルイズム、ないしマス・コミュニケーションの機構

一五六 (九九〇)

にその原因を求めるべきかも知れない。いずれにせよ、現在のジャーナリズムがこれらと切つても切りはなせない不幸な関係にあることは否定し難い。これに対して、アカデミックな世界における専門研究者に対するこの二者択一問題は、多くの場合逆の結果をもたらすであろう。多数の研究者が迅速と正確のうち後者を選ぶであろうし、又、彼等は、自己のもつ情報が多数の人々に達することを最終的に望みながらも、少数の然るべき受容者をもつことで満足すると思われる。すべてが望ましい形で行われれば、この情報伝達におけるウエイトの相違は何らの問題も生じないかも知れない。しかしながら、現実には、迅速が不正確、ないし拙速主義と結びつき、多数の人々を情報の受容者として期待することが、これらの人々に受け入れ易いアイディアと言葉を使うことに結びつく。ジャーナリズムの世界では、それがいかに適確に語られても、常にコンベンショナル・アイディアが基底となつているし、たとえ、それが、いかに事実となれようと人々の耳目をそばだてるキャッチフレーズが必要とされる。

戦後の学界のもう一つの傾向は、政治ないし官僚の世界との接近であろう。いわゆる御用学者は何時でも存在したが、最近の傾向は少し様子がちがう。こうした表現を使うのは少々気がひけるが、この接触が「体制として定着化した」とでもいおうか。調査ないし諮問という形を通じて両者が一体化しつつあるように思われる。自己の研究の成果、見出された事実とその説明、そしてこれらにもとづくあるべき社会のすがたが政策に反映する意味でアカデミックな研究者の行政事務ないし計画策定への参加は、本来否定するべきものでないし、むしろ望ましいことであろう。しかしながら、ここにもまた危険な要素が潜んでいる。というのも、このあるべき社会のすがたそのものの意味、或いはそれを考える立場が、本来、政治家、行政担当官、そして研究者と三者三様夫々独自であり、微妙に相違しているからである。この場合もまた理想的三位一体を考へることは可能であろう。だが、現実には、これら三者の立場は冷静な目でみるならば、絶望的といつてよい程はなれているといわざるを得ない。しかしながら、

新刊紹介

現実にこれら三者は協力している。そして、この協力を通じて、研究者は多くの場合、事実を政治家の目で見えて説明し、行政担当官の処理の仕方と問題を解決し、計画を策定してゆくことに慣れてゆく。他方、政治家、とりわけ行政担当官はアカデミックな研究者との接触によって、専門分野におけるアカデミック・ジャーゴンを自家菜籠中のものとなし、「能吏」としての資格を一層強化させることになる。この結果、事実が明確に把握説明され、問題の処理は適格にそして計画はいよいよ精緻・周到になる。しかしながら、かんじんの行政サービスをうける人々、計画の実施によつて生活そのものを変えてゆく住民の意見は何処にあるのであろうか。出発点において、三者が夫々の立場からサービスの受容者の福祉を考へていたことは事実であろう。しかしながら、皮肉なことにこれら三者の協力の過程において、それらは政治的思惑と官僚的能率、ないし機構の存続と多数のアカデミックな専門語の中に消え去ってしまったのである。

これら最近の学界における二つの特色は、

その帰結として「アカデミックな官僚ジャーナリズム」の隆盛を生みだしている。本書は、そうした分野に属する代表作ともいふべきものといつてよいであろう。執筆者は一流、そして内容も実態分析とその説明モデル、そして政策提案まで極めて充実している。しかしながら、これが果して実態か、適格な説明か、そして望ましい政策か、を考へる段階に我々はさしかかりつつあるのではなからうか。(鹿島出版会・昭和四二年五月刊・A5・二七〇頁・九八〇円)

—高橋潤二郎—

一五七 (九九二)